［研究ノート］

幕末の蘭学修業時代(1)

——日蘭通商の背後を支えたもの——

斎藤祥男

〈目　次〉

はじめに
一　蘭学塾入門手続（束修の礼）
二　蘭医書の翻訳・著述物
(1)蘭医の著述パターン
(2)坪井信道父子の著書・翻訳業績
(i)坪井信道の訳書・著述
(ii)坪井信良の訳書・著述
(iii)坪井為春の訳書・著述
(3)翻訳方法と翻訳権
(4)洋(蘭)学書籍等の輸入・流通事情

（以下は次号に続く）

はじめに

幕末鎖国期の日本が，西洋文化を取り入れながら次第に開国へ向けて動き出していったなかで，日蘭通商の果たした役割の大きなことは論じるまでもないだろう。

筆者は，先に，別稿『徳川鎖国期（幕末）の技術導入』を発表し，オランダ通商を通じてなされた日本への技術導入の実態を，事例を含めて技術移転の段階的形態を論述した。そして，技術のみならず，通商にとって極(きわ)めて重要な地位を占めた外国語習得技術の開発過程を詳述したが，これこそ今日の発展途上国が先進国技術の導入にあたって，十分に適用できるノウ・ハウであることも併せて強調しておいた。

わが国の場合，寛永17年(1640)に徳川幕府が鎖国を完成し，以降は長崎のオランダ商館が幕末(維新)までの対外通商の唯一の窓口となったことは周知のとおりであるが，その間にあっても享保5年(1720)に八代将軍吉宗が洋書を解禁してから約100年間は，蘭学は徐々に興隆期に向かっていった。その当初の主流は形而下的科学技術としての医学分野であった。

このような認識のもとに，本稿では紙幅の都合上「別稿」では十分に触れることができなかった蘭学修業の事情についてやや詳しく解明し，洋医学の吸収を通じてなされた日本の近代化の過程を探ってみることにする。このことは，とりもなおさず導入された知識が医学から自然科学へ，そして近代軍事科学的分野へと裾野を拡げ，殖産振興や科学技術の開発に貢献することになったわけであるが，その主要な手段は対外通商により達成された。そしてその背後には，外国語であるオランダ語の習得という障壁の克服があったことを見逃すことはできない。本稿では「幕末の蘭学修業事情」を採り上げる。

一　蘭学塾入門手続（束修の礼）

当時の仕来(しきた)りとして，門下生となること，つまり「贄(し)を収め師弟の約束をす

る」ためには，束修の礼を行なった．「修」とは乾燥肉のことで，それを束ねたものを持参して，生徒から師に贈る最低のお礼が束修であり，中国の故事に倣っている．論語に，

「子曰く，束修を行ないてより以上は，われいまだかつて誨うることなくんばあらず」（原文は漢文）

とあり，束修の礼をもって教えを請われれば，その者がどんな人物でも必ず教えを施すのが孔子の態度であったが，当時の日本では，必ずしも誰でも入門を認めたわけではない．寺小屋，漢学塾，蘭学塾などに入塾するにあたって，束修として，扇子のみ，あるいは金銭を添え，または金銭のみを呈上して，申し込みをしたが，時には，身許引受人や紹介者の推挙が必要な塾もあった．もちろん，武士にあっては，大小の腰の物(刀)と袴をつけなければ，塾生として勤めることはできなかった．因みに，吉田松陰が佐久間象山の門に入るにあたって，束修の儀について述べた徳富蘇峯の記述に，次のものがある．

「彼れ等の相見るや，実に嘉永4年江戸に於いてす．（中略）乃ち（松陰）平服のままにて其の門に入る．象山儼然として曰はく『貴公は学問する積りか，言葉を習ふ積りか，若し学問する積りならば，弟子の禮をとり来れ』と，松陰乃ち帰りて衣服を改め，上下を著し，其の門に入れり．」[(1)]

この記載は誤りであって，松陰は礼装して象山に入門を申し出ている．一説に，松陰の兄杉民治の上下を借りて着て行ったという話もあるが，これも事実ではなく，後年，杉民治は明確に否定している．すなわち，

「（松陰は当時）公駕に陪し東行す．麻上下熨斗目迄持ち行く，士分一と通りの礼服に支りなし，このこと誰れかの書きたるものにも見る，何かの誤聞なり」と．

このように，束修の礼をとるには，大小の腰の物と上下（礼服）は礼儀の第一歩であって，松陰の場合は長州の蘭学者であり，象山とは面識のあった田上宇平太（伊東玄朴の象先堂塾監経任者）の紹介を得ている．永年萩で兵学師範をしていた松陰は，束修の礼の執り方ぐらい百も承知していたであろう．それをいい加減にするはずはなかったと思われる．

また，桂川（蘭学）塾の門に入って，『東都遊学漫録』を残した藤田正知は，

各塾入門費用

宛先	摘要	①日習堂	②象先堂	③独笑軒	④適塾	⑤咸宜園	⑥山鹿素水	⑦佐久間象山
師	束修料 扇子料	金壱百疋 金五十疋	金弐百疋 扇子一箱	金弐百疋	金弐百疋 銀三匁	金壱百疋	金壱歩	金弐百文 扇子
奥方	鼻紙料	金五十疋	金壱百疋	金二朱				
若先生			金五十疋					
塾頭		金五十疋	金五十疋	金二朱	金五十疋			
塾監		半紙二帖 (二名・四帖)		金二朱				
塾中		各人あて 半紙一帖	金弐百疋	金二朱	金五十疋			
塾僕		一人に付き 銭二百文	金五十疋	銭二百銅				
盆・暮 付け届け		黒豆一升	適宜	先生-二朱 僕-銭百銅宛	適宜	盆・暮各 金壱百疋		
	(計)	約金三百疋	金六百五十疋	約金五百疋	約金三百 疋超	暑・寒に 肴料若干	吉田松陰 の場合	同上

(典拠) ①は『日習堂蘭学塾』(仲田一信), ②③④⑤は『蘭学の時代』(赤木昭夫), ⑥⑦は『吉田松陰の研究』(広瀬豊) の各著より引用した.

入門についての苦労を明らかにしている。[2]

弘化3年(1846) 5月, 奥州二本松を発って江戸に上(のぼ)った正知は, 旅装を解くとその足で築地の桂川甫周(七代目)を訪れ, 入塾を求めたところ, 門弟頭の小館甫全を尋ねよと言われた。甫全を訪ねて桂川塾への入塾の望みを告げたところ, 江戸に身許引請人(人主)がなければ入門できないと教えられ, その日は夕方むなしく宿に帰った。

翌日正知は, 本多越中守の家中の根本権之丞を訪ね, 二本松から携えてきた紹介状をわたし, 身許引請人となって欲しい旨を哀願した。どうにか承諾を得られた彼は, 桂川家を訪れ, 応接に出た門人の香川道一に寸志として紙一帖を呈して, 入塾を申し込んだ。おそらく, 根本権之丞から束修の礼のとり方を教えられたのであろう。彼は懐中がさびしいのに無理をして, 格式にしたがって寸志を呈している。後に彼は根本権之丞への謝辞として, 次のごとく記した。

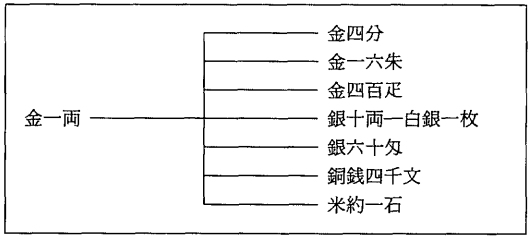
「誠ニ我偶(たまたま)他郷ニ来リテ孤客トナリ，今君ノ言ノ如キヲ非(ウルニ)レ得(アラ)スンハ(ば)，何人カ我ヲ済(すく)ハン．忽チ蘇生ノ思ヲ得タリ，何レノ時カ酬スル事ヲ得ン」と．

坪井信道が広瀬淡窓の門に学んだときは，豊前中津奥平藩の儒官，倉成竜渚の紹介を得ていたであろうし，広島の中井厚沢の門に入ったときにも，束修の礼はとったはずである．しからば，当時の入門費用はどの位の金品(きんぴん)が必要であったか．前頁に比較表を掲げておいた．

そもそも束修は師が要求するものではなく，弟子が志として任意に出すものであるから，本来定額はない．弟子が富裕なら多額を，貧しければ少額でも止むを得ないものである．しかしながら，あまりにも格差がつきすぎては仲間同士としても快くないし，一方では塾運営費用の最低はカバーする必要もあったであろう．漢学塾で最も制度的に整備されていたといわれるのが，九州日田の咸宜園(広瀬淡窓)であった．そこでの束修は定額で金壱百疋と統一されていた．そのほか入塾後の付け届けが必要であった．

江戸や大坂の蘭学塾も，早くから開設されてきた漢学塾に倣って，束修を決めていたが，信道の坪井日習堂は伊東玄朴の象先堂にくらべ，半分ぐらいの割安な費用ですんだ．これは，信道自身が修業時代に貧困に悩まされて，束修もなかなか支払えなかった体験から，塾生たちの負担を軽くしてやろうという配慮からだった．参考までに，当時の貨幣換算表を掲げておく．

貨幣換算表



(注)　赤木昭夫『蘭学の時代』中公新書より借用．

二　蘭医書の翻訳・著述物

(1)　蘭医の著述パターン

蘭医書を研究して西洋医学を著述した当時の医学者にとって，その学理の基本には蘭医書がベースに据えられたのは当然であった。したがって著述書は，到来したオランダ原書の翻訳と，それらをもとにしてみずから診療実践したり，実験した技術を纏めて書いた著作物とが主なものであった。しかし，中には漢医方を学んでから蘭医方を取り入れた人もいるから，必ずしも蘭医学の原書にしたがったとは言えないものもある。

また，翻訳のしかたについても，オランダの医学原書を忠実に邦訳したものもあれば，こまかい文法などは無視して大意を捉え，要旨を中心に論述したもの，あるいは，積極的に自己の見解や注解を試みたものなど，訳者の考え方の相違がみられる。この意味では，訳書なのか，注解書なのか，独自の著書なのかを区分すべき境界は，すこぶる曖昧(あいまい)にならざるを得ない。そのうえ，訳者の漢学の素養もまた大きく影響を与えるから，さらに複雑である。

緒方洪庵が恩師坪井信道に『病学通論』の校閲を求めたところ，信道は洪庵に次のように忠告している。(3)

「乍失敬(しつけいながら)文辞の上は御地にて医事相心得候(あいこころえそうろう)儒家へなりとも篤(とく)と御相談可然奉存候(しかるべくぞんじたてまつりそうろう)。小子草々心付候丈けは申上候へども，多忙中中々(なかなか)十が一と奉存候，世間眞実の人は稀なるものにて，文面よろしく候へば，是はと感服いたし，文面不行届に候へば眞実に不拘(かかわらず)妄誹謗する輩(やがら)多く困却仕候，小子ならでは大兄へ箇様申上候ものは有之間敷(これあるまじくぞんじたてまつりそうろう)奉存候，江海之量幸に不敬を怒(ゆる)せよ」と。

大変丁重で遠慮がちながら，率直なことを言っている。漢医方に見くびられないためには，漢文調でもっともらしく権威づける文体が求められるのだと言いたげである。若い時から漢学に精を出し，斯界の名文家であった広瀬淡窓に師事し，みずから漢詩を良くした坪井信道にしてみれば，洪庵の訳文ではフィ

ーリングが合わなかったのであろう．しかし洪庵は，その著『病学通論』の「題言」で，自分の考えを主張している．すなわち，

「或云．此編意義通達，論理精密ヲ尽セリト謂ベシ．惜哉．文字鄙俗ニシテ雅ナラス．恰モ美羹ヲ馬槽ニ盛レルカ如シ．人顧ル者アルコト尠カラシ．蓋シ此挙ハ所謂病学ノ嚆矢ナリ．一タヒ世ニ布カハ『天下後世必ス軌範ヲ之レニ資ラン．実ニ凡庸ノ事業ニアラス．願クハ子意ヲ事物ノ名称等ニ注ヒテ再三之レヲ改正ヲ加ヘヨ』章云ク．然リ余モ亦嘗テ文字ヲ正シ，章句ヲ明ニシ，文ヲ学フノ余暇ヲ得ズ．卑拙浅陋悔ユトモ及バス．以為ラク．遺芳ノ備ラサランヨリハ寧口臭ヲ伝ヘザル者勝レリト．将サニ此稿ヲ擲テ筐中ニ投シ，終歳顧ルコト亡ランとス．此口四方有志ノ士，余カ此挙アルヲ聞テ其公行ノ遅キヲ責ムル者多ク，或ハ之レヲ請テ止マサルコト饑渇ノ飲食ヲ望ムカ如キ者アリ．斯ニ於テ復タ遺命ノ遅遅ス可ラサルコトヲ念ヒ，其卑陋ヲ省ミス，遂ニ梓シテ以テ後ノ君子ヲ俟ツノミ」と．(4)

洪庵はみずから宣言しているように，漢学の影響を受けていないから，漢文の美辞麗句や語句をもって美文化することよりも，単純明解な論理で精密さを重んじ，そのため，たとえ「美羹（おいしいご馳走）を馬槽（馬の食物桶）に盛る」ようなものだと批判されても，いっこう構わないとの態度である．「そもそも翻訳は原書を読み得ぬ人のための業なり」というのが，洪庵の自説であったという（『福翁自伝』）．

したがって，この後に翻訳と著書を一括して掲げておくが，明確なものを除いて，翻訳書とみるか著書とみるかは，読者の英邁なるご判断に委ねたいと思う．

(2)　坪井信道父子の著書・翻訳業績

蘭医学の著書・訳書は，幕末期においても相当多数に及んでおり，その内容を記した文献も種々あるので詳細はそれらの専門書に譲り，ここでは縁ある誠坪井信道と義子である信良・為春父子の主な業績のみを掲げておく（なお，そ

の他のものは項を改めて概要を後述した)。

(i)坪井信道の訳書・著述

①『万病治準』全二十冊（注；富士川游博士は三十巻と記す)。

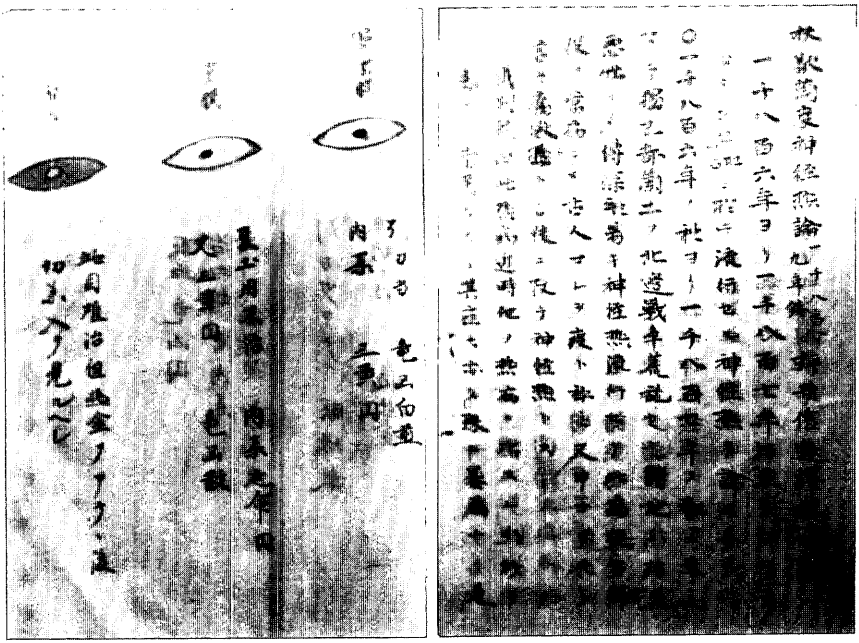
ブールハーフェ（Hermann Boerhaave）の門下生のスウィーテンの著書を翻訳したものである。

内容については，京都の阿知波五郎博士が詳述しているので割愛する。

②『診候大概』(著述)

フーフェランド（Christoph Wilhelm Hufeland）等の原書を底本とし，自己の経験を加味して執筆されたものであろう。

富士川游博士はこの本を，「わが国最初の本格的診断書」(籍)と評価され



右は坪井信道訳「扶歇蘭度」の『神経熱論』(1809年)の書き出しの部分.

左は，その訳稿のうち眼の病状の解説部分(青木一郎氏迢族所蔵)〔共に筆者撮影〕.

ている．日本医学史綱要に曰(いわ)く，「診断学の著述は，坪井誠軒の『診候大概』〔文政九年（1826）〕を以て嚆矢とすべし」と[5]．なお，高野長英の『察病論』なども，その内容は大抵この書物と同様という．

③『製煉発蒙』（二巻）

④『歇氏神経熱（注；痛）論』（一巻）（上掲写真参照）

フーフェランドの翻訳本である．

⑤『遠西二十四方』（二巻）

⑥『医則』（若干巻）

⑦『疙法総論』

「できもの」治療法に就いて記述したもの（仲田一信博士説）

⑧ その他

訳業に協力した図書として，宇田川榛斎が幕府の委嘱により，ショメール（N. Chomel）の大百科辞典を翻訳して完成した『厚生新編』に，信道は協力したといわれる．

また，仲田一信博士の指摘によると，「坪井日習堂には長州藩をはじめ，各方面より砲術・兵法書の翻訳依頼が多数きていた」旨(むね)を記されているが，これらは訳書として出版されるものではなく，藩政府などの参考図書として用いられた．

さらに，弟子筋にあたる緒方洪庵が『病学通論』の校閲を依頼してきたとき，信道は文辞表現のあり方について忠告をしていることは，すでに述べたとおりである．

⑨『冬樹先生遺詩』（死去後の発刊）

(ii)坪井信良の訳書・著述

①『新薬百品考』

②『侃斯達篤(カンスタット)　内科書』

原著者はCanstatt（Karl Kanstatt）［侃斯達篤(カンスタット)］である．

③『内科闡微』

④ その他多数がある．

(iii)坪井為春の訳書・著述

①『医療大成』〔薬剤篇〕

②『医療新書』（翻訳）二巻

原本はLebert（列（レ）鼈（ベ）爾（ル）篤（ト））の内科書の翻訳である。

③『丹氏医療大成』（全六巻）

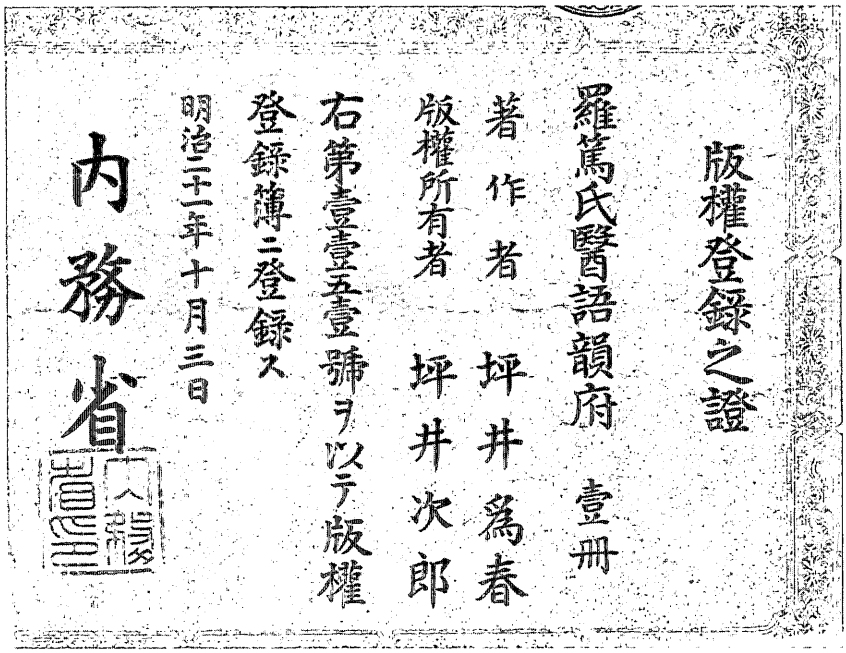
④『弗氏生理書』

（米国ニューヨークの医師ホチソン〔ハチソン〕の原書の小林義直との共訳。現在筆者が保有している）

⑤『百科全書』（医学篇二冊，養樹篇，寧樹篇各一巻）

⑥『華氏生理書』

⑦『初学生理書』


版權登錄之證
羅篤氏醫語韻府　壹冊
著作者　坪井爲春
版權所有者　坪井次郎
右第壹壹五壹號ヲ以テ版權
登錄簿ニ登錄ス
明治二十一年十月三日
内務省

⑧『新撰方鑑』

⑨『羅馬氏醫語韻府』（前頁写真参照）

⑩『ペレイラ製薬舎密』一冊

次掲の抜萃書を著述しているところからみて，芳州（為春）の訳書と推定される[6]（島津家文書として保管されている）．

⑪『ペレイラ舎密精義抜萃』一冊

坪井芳州の自署がある[7]．

⑫『獲海鰌記』（訳本）一冊

捕鯨に関するもので，芳州の訳書のなかでは異質なものである．多分，藩命により訳出したものであろう（島津家文書として保管されている）．

(3)　翻訳方法と翻訳権

まず翻訳方法は，オランダ通詞の口頭解説をたよりに，オランダ語対応の辞書作りから始められたようである．オランダ通詞も医学については素人（しろうと）であって，医学生が対応する漢語を当てはめるにあたって，大変に苦労したのは当然であった．このことから，蘭医書の輸入が増加するにつれて，オランダ商館では，通詞に医学の講義をするようになる．

因みに，明和8年(1771)に世にでた前野良沢（りょうたく），杉田玄白の共同翻訳書『解体新書』を手がけるにあたって，前野良沢は47歳で長崎に出てオランダ語を学び，まず辞書の編纂（さん）を決心している．オランダ語を学ぶ者はみずから辞書の編纂のため，「語のう」と「文法」を解明しなければならなかった．

後に『波留麻和解（ハルマわげ）』や，『ヅーフ・ハルマ』（通称『長崎ハルマ』）とよばれる蘭和辞書が完成してからは，これが良き手引きとなるが，それでも意味不明の場合は，ウェイランド（P. Weiland）の蘭蘭辞典が併用された．因みに，『長崎ハルマ』より30年も前に，『波留麻和解（ハルマわげ）』（通称『江戸ハルマ』）は作成されていたという[8]．

『江戸ハルマ』は，長崎通詞であった馬場清吉（後に石井恒右衛門＝庄助と改称）の蘭和辞典の原稿をもとにして，稲村三伯が寛政8年(1796)に，宇田川玄随（槐園）や養嗣子の玄眞（榛斎）らの協力により完成した最初の蘭日辞典である．ま

た，『長崎ハルマ』は，当時，長崎出島のカピタン（館長）であったヘンドリック・ヅーフ（Hendrik Doeff）が，通詞・吉雄権之助(注；耕牛の子）とともに，フランソワー・ハルマ（François Halma）の『蘭仏辞典』を『蘭和辞典』に作り変えたものであって，原典は通詞用に輸入されたものである。ヅーフ離日後に完成されたこの『蘭和辞典』は，吉雄権之助らによって清書して33部が作られ，その1部ずつがそれぞれ長崎奉行と幕府に献本された（天保4年＝1833)。

その後，藤林普山(泰助，1781—1836）が『江戸ハルマ』から約3万語を選び，「ハルマ」普及版ともいうべき『訳鍵』を100部刊行した。今日の「コンサイス辞典」に匹敵する。また，安政2年（1855）には，桂川甫周が，『和蘭字彙』「前部」を，同5年に「後部」を刊行しているが，『ヅーフ・ハルマ』の類似のものという。

一方，緒方洪庵はみずからの研究用には，万延元年（1860）に入手した『クラムレス古語俗語辞典』（1850年版）を愛用していたようである。(9)

なお末尾ながら，広田憲寛が『増補改正訳鍵』を，中津藩主奥平昌高と神谷弘考による『蘭語訳撰』(1810)，および，大江春塘の『中津バスタード辞典』(1812)も出版されていたことを付言しておく。(10)

さて，これらの辞書はすこぶる稀少であり，高価なものであったから，入手は大変困難であり，蘭学塾では共用のため閲覧は各自順番制であったり，どうしても専用にしたいときは，自分で写本を作ったりして用いた。次に二つのエピソードを紹介しておこう。

有名な緒方洪庵の適塾には，通称「ヅーフ部屋」と呼ばれる部屋が設けられ，『ヅーフ・ハルマ』（蘭和辞典）とともに，上級者用には『ウェーランド蘭語辞典』も備えられ，塾生はこれらの辞典を交互に利用した。長与専斎の松香私志(自叙伝)によると，塾生は「立替り入代り其部屋に詰め込みて前後左右に引張り合い，容易に手に取ることも叶はざる程なり」とあり，ヅーフ部屋で徹夜する塾生も多く，「字書を坐右に控え原本にて書き読むことを得は天下の愉快ならんといひ合へり」という状況であった。専斎の祖父の時代には，「ウェーランドの字書も購(あがな)はんとて伝来の古剣古墨を売払ひ玉(たま)ひし程のこともありしと聞えぬ」という

ほどに，辞書は高価であって，先祖伝来の家宝に比すべき古剣や大家の遺墨書画まで売却して，辞書を購入した[11]．

また，石黒忠悳は『懐旧九十年』でいう．

「その頃，先輩の坪井先生（筆者注；坪井為春のこと）などは，私どもに『君らはよい世に生れて学問を楽（らく）にする．われわれの書生時代にはズーフの《和蘭字典》15冊を自ら写して使用したもので，西周（にしあまね）君はこのズーフを2部写し，1部を自用とし，1部を備前（岡山藩，西周の出身藩《筆者注》）に売って自分の学費にした』と話されたことがあります[12]」

これからみて，当時の学生たちが蘭学を勉強するのに，どんなに苦労したかがよくわかる．今日（こんにち）にしてみれば，まさに隔世の感があるが，苦労のない勉学が身につかないのは，いつの世でも同じであろう．

次に，文法の理解はどうであったか．

オランダ文法は漢文法と類似点があるところから，横書きながらも，品詞を活辞（動詞），性辞（冠詞），陪辞（形容詞），実辞（名詞），接辞（接続詞）などに区分し，漢文のレ点（返り点），順位記号（一，二など）と同様に，甲乙丙丁などの記号で訳出順位を表わしたり，●（実辞＝名詞），○（性辞＝冠詞），▲（陪辞＝形容詞），□（活辞＝動詞），■（接辞＝接続詞）で区分して，訳出方式を示す方法がとられた．これらの文法は，各蘭学塾により異なり，塾主が編纂した文法書が用いられた〔因みに，その事例は，別稿[13]に詳述したので，ここでは割愛する〕．

これらの文法書には，初期に青木昆陽の『和蘭話訳』『和蘭和記後集』『和蘭文訳』などがあり，その後に，前野良沢『和蘭訳筌』，宇田川玄眞『検篭韻府』，大庭雪斎『和蘭文語凡例』，緒方洪庵『和蘭詞解略説』などが続き，やや高等な文法を理解するためには，マートシカッペイの『和蘭文典前・後編』（注；当時の日本では，前編を『ガランマチカ』，後編を『セインタキス』と俗称された）などが用いられた．

当時，坪井塾では塾主信道の几帳面な性格を反映して，オランダ語の邦訳にあたって厳格な文法適用が求められたようで，後年の大家緒方洪庵の蘭学の方法（論）を決定したのは，「明らかに坪井信道と宇田川玄眞であった」という[14]．

次に原書の著作権と翻訳権についてはどうであったか。もちろん当時にあっては，今日のように知的所有権や著作権の法規は確立していないし，条約も存在しなかったから，原書に対する著作権料は支払われていない。翻訳権については，訳書について原著者や出版社に対してロイヤリティの支払いはないけれども，翻訳した書物を日本で公刊する場合，版木（はんぎ）に彫って印刷したので，この版木が財産権として評価されている。次に，宇田川榛斎（玄眞）の『医学提綱』をめぐる一つのエピソードを紹介しておく。

赤木昭夫氏によると[15]，当時，翻訳書の出版で大手は，須伊屋伊八という者であって，須伊と略称され，はじめ下谷池之端仲町にあったが浅草茅町に移ってから，ほとんど翻訳書出版を独占していた。宇田川家との間では，売価から製本費を引いた差額が，版木の貸出料（一種の著作権料）として増刷ごとに須伊から支払われることになっていた。

天保5年に榛斎が死去すると，養子の榕庵は藩医として津山藩の江戸藩邸に住んでいたが，榛斎の妻は榕庵とは同居せず，榛斎の隠居先であった深川に留っていたが，亡夫の遺言と称して，亡夫の実家（伊勢の安岡家）の再興を申し立て，別に養子として大沢松庵なる者を深川に住まわせた。この松庵は，亡夫榛斎の高弟である坪井信道の門人であった。

天保10年の初夏，養母である榛斎の未亡人が突然坪井信道を訪れ，「松庵を養子に決めたから取り持ちせよ」と要求し，「相続の手当とするから宇田川家の蔵板を譲渡するように，榕庵に対し信道から説得せよ」と申し立てた。『医学提綱』をはじめとする故榛斎の著作物の売れ行きの良さに魅せられて，養母はその収入をひとりじめにするつもりでいたのだろう。

信道はこの要求にほとほと参ってしまった。榕庵とは信道入門以来のつき合いであり，若先生として仕えた人であるばかりか，故榛斎が後継者として早くから決めていた人である。また，蔵板は宇田川家に伝わるもので，それを他へ譲渡することは，嗣子の榕庵が許すはずもない。

信道が榛斎から受けた恩は，終生忘れられないほど大きい。未亡人から，榛斎の遺言であり，意志であると言われると，信道は返す言葉に窮してしまった。

激し易い性格の未亡人をなだめるため，当夜はひとまず榕庵説得を承知して，未亡人に帰宅してもらった．

翌朝さっそく信道は榕庵を訪問して，ことのいきさつを説明したが，榕庵は「けしからざる事に候」といきりたった．しかし，信道は，養母の強い性格から，激昂すれば病死に到るかも知れない．そうなれば養子たる榕庵の不孝となるから，ひとまず承知するように説得した．しぶしぶ信道の案を呑んだ榕庵は，宇田川家の蔵板の譲渡証文を書き，信道も判を押して養母に渡した．

しかし，榕庵はどうしても腑に落ちない．遂に，信道以外の榛斎の高弟であった藤井方亭，渡辺之端，戸塚静海も巻き込んで，信道を含む4人にあてて榕庵は事件の調停依頼状を書いて，松庵の非を訴えた．

榕庵は，蔵板の由来について次のように述べている．すなわち，「養父榛斎の『提綱』刊行にさいして，家業出精と藩主から賞詞をうけ，上木の費用の扶助を受けたのであるから，蔵板は藩主の恩賜品であるのと同じである．」すなわち，榕庵は養父榛斎が死没してから，養父のあとを継いで津山藩医として仕官していたが，養母が勝手に決めた養子松庵は，津山藩主には認知されていない．したがって，恩賜により彫板された版木(はんぎ)は，当然藩医である榕庵が管理・占有すべきものであり，藩侯の許しがない以上は他に譲渡はできないというのである．

榛斎は研究熱心で本ばかり読んでいる榕庵の性格を良く知っていた．榕庵が患者の治療によって生活をたてるのは不得意であるから，より研究を深める読書に精励できるよう，金に代えて版木を家に残す旨を語ったという．榛斎と榕庵は，ともに版木は家のために残すべきものと考えていたのであり，学統の継承者こそ版木の所有権者となりうるとの認識であった．養母の死後，須伊の店に現れて蔵板の引き渡しを要求した松庵の手には，結局版木は渡らなかったようであるが，詳しい結末はわからない．しかし，天保11年8月3日に，榕庵は「雀角之禍(じゃくかくのか)」（つまらぬいざこざ）は解決したと識(したた)めている．

(4)　洋(蘭)学書籍等の輸入・流通事情

蘭書の輸入が正当に認められるようになったのは，享保5年(1720)に徳川八代将軍吉宗が洋書を解禁してからであるが，これらの洋書輸入に対しては，キ

リスト教禁制の原則は維持され，西洋文明の形而下的な部分を摂取しようとする基本態度が貫かれていた。蘭学の芽が伸びて花を開いたのは，田沼意次（おきつぐ）の積極政策によるものであった。

しかし，慶長7年(1602)，オランダ東インド会社が設立され，ジャワ島のバンタン（Bantam）に商館を開設し，慶長14年5月（1609年7月）に，ローデ・レーウ号とフリフーン号が長崎港外に到着してから，その後2世紀半にわたる日蘭関係の端緒を開くことになるのであるが，慶長16年(1611)には，東インド会社は平戸に社宅と倉庫を新築し，翌年には館員を大坂と江戸にそれぞれ1人ずつ置き，すでに取引に入っている。

日本とオランダの貿易は，周知のように当初は平戸商館を，後に長崎のオランダ商館を通じて行なわれるわけであるが，当初の洋医学書の多くは，主として幕府高官の注文によるものと，会社が長崎の通詞団用として輸入したものという。[16] しかし，オランダ東インド会社解散後の文化・文政・天保年代から幕末期にかけては，長崎商館の職員・船員，あるいは私貿易品（脇荷）として，みつくろいで大量に輸入されるようになった。江戸時代の輸入蘭書は数千部，おそらくは1万冊を超えるのではないかとさえみられている。しからば，どんな書物が輸入されたのであろうか。山脇悌二郎氏の研究を参考に，それを補いながら分類してみよう。

①解剖学書

解剖学書の初見は，明暦元年(1655)の『ヴェザリの解剖書』(anatomia Vezalij)であるという。同書は万治2年(1659)にも長崎商館の職員用として持ち込まれている。

寛文8年(1668)には，オランダ医家の『アドリアン・ファン・デン・スピーヘルの解剖書』(Adrianus Spiegels anatomia)が入着しているが，これは老中稲葉正則の注文品で，その翻訳を通詞の本木庄太夫（本木栄久）が命じられている。同書は寛文10年(1670)にも入荷している。万治3年(1660)には『人体解剖図』(anatomia cosmographia）の輸入があるが，これは商館備品として寛文期の末まで保存された（教授用とみられる）。

『解体新書』の種本といわれる「ターヘル・アナトミア」は，ドイツの解剖学者ヨアン・アダム・クルムスの『解剖学入門書』のオランダ語訳本であって，前野良沢は明和7年(1770)に長崎で入手したようだが，長崎商館の医務職員が携行してきたものかも知れないといわれる．

②外科書

外科書の初見は万治2年(1659)で，フランス人『アンブロシウス・パレの外科書』(chirurgie van Ambrosius Paré) であって，この書は1649年版の『アンブロシウス・パレの外科と全集』(De Chirurgie ende Opera van de Werken van Mr. Ambrosius Paré) のことであり，出島商館の医務職員ウィレム・ホフマンが通詞楢林新五兵衛を教導するのに使用したものという．また，寛文8年(1668)に稲葉正則の注文品で，『ホルチス・エクステルテンシス』(Hortis Extertensis) という3冊の書籍が入荷している．

宝暦7年(1757)，ドイツ医家のラウレンス・ヘイステル (Laurens Heister) の外科書をオランダのヘンドリク・ホールンが翻訳・注解した『外科書』(12巻) が入着し，宝暦11年(1761)，同13年(1763) にも輸入されている．これは，杉田玄白が最初に手をつけ，次に大槻玄沢が受け継いで完成したヨーロッパ外科書の最初の翻訳書といわれる．

享保10年(1725)に『ステファヌス・ブランカルトの外科書』(chirurgijns geneesboek van Brankart) (訳書は『内外治療精義』) と「療馬の書」(Paard geneesboek) が輸入されている．

③辞書・辞典類

『フランソワー・ハルマの辞書』〔略称ハルマ〕(François Halma) の入着は宝暦四年(1754)である(ハルマは出版社名)．初版は宝永5年(1708)であるから，渡来まで46年も経っている〔「ハルマ」については，先に詳述したので当該頁を参照のこと〕．

『ピーター・マリンの辞書』〔通称マリン〕(Pieter Marin) も宝暦四年の入着．そのあと宝暦6年(1756)，同11年(1761)，同12年(1762)，明和元年 (1764) と続いて入荷している．通詞用に輸入したもので，原本はフランス人ピエール・マリ

ンであるが，これを仏蘭・蘭仏の二種にした上下二冊本である。

『羅蘭辞典』（ラテン語見出しの蘭訳辞典）である言語辞典一冊が，宝暦4年(1754)，および寛政6年(1794) に入着しているが，通詞用のものである。

オランダの医者ロデワイク・マイエルの『辞学宝鑑』(Woordenscbat) は宝暦13年(1763)，安永2年(1773)年などの積荷目録に記載があり，明和元年(1764)にはドイツ学者のヨハネス・ヤコブ・ワイツの『医学辞典』の蘭訳辞典が到着している。この時には，ワイツの『医学宝函』(Schatkamer der Genees en natuurkundige Zaaken)，レンネウスの『蘭仏辞典』，マルチネの『蘭仏辞典』なども積載されてきたが，主として通詞用である。

有名な『ショメルの家庭百科辞典』(Noel Chomel, Huijshoudelijk Woordenboek) は，フランス人ショメルの原著を蘭訳したもので（七冊と続編二冊)，天明7年(1787)以前に日本に入っていたが，1800年にも入着している。宇田川榛斎等が幕命により翻訳し，『厚生新編』の名で洋書調所に収められた〔因みに，この原書と同じものを，現在筆者は保持しているので閲覧に供することが可能である〕。

また，当時の長崎商館あて送り状には見出しえないが，蘭医や蘭学者たちの遺品から発見されたものとして，次のものがあるが，これらは脇荷として入着したものか，オランダ東インド会社解散後に入ったものと思われる。

- 『ハルマ蘭仏辞典』(1781版)
- 『クラムレス古語俗語辞典』(1850版)

④本草書

『(生命を救うための) ドドネウスの本草書』(Herbarium van Dodoneus na't leven) と，ピソの『西インドについての博物学』(Historie Naturalis van Westjndien) と記された書物が，承応元年(1652)に舶載されたものが，翌年に商館長フレデリク・コイエットが江戸参府のおりに，注文者である幕閣の井上政重に手渡されている。ライデン大学の医学教官であったドドネウスの本草書は，明暦元年(1655) にも入着し，長崎商館に備え付けられたが，以後寛文6年(1666)，宝暦年間にも引続いて輸入され，寛延3年 (1750) に，当該書の約200種の薬物の名称・効用を抄訳して，幕府の医官野呂実夫(元丈)が『阿蘭陀本草和解』を刊行し

た．

また，寛文3年(1663)年，商館長ヘンドリク・インダイクは，『ヨンストンの動物書』(John Johnstone) を将軍に献上しており，後年野呂実夫が『阿蘭陀禽獣虫魚図和解』と題して翻訳している．これは，江戸参府の商館長ワエイン(Jacob van der Waeijen) と蘭医ムスクルス (Philip Pieter Musculus) に，通詞の吉雄藤三郎の通訳を得て質疑し，野呂実夫が纏めたものという[17]

⑤地図・理学書・兵学書など

蘭訳地理書の入着初見は宝暦13年(1763)のドイツ学者ヨハン・ヒュブネル (Johan Hübner) の地理書であったといわれる．地理学に密接する世界地図も正保4年 (1647) にはすでに入着しており，井上政重が代金を支払っているから，幕府用である．享保2年(1717)には新井白石も注文した世界地図を受け取っている．世界地図は結構輸入されていた．

また，イギリス人ジョン・ケイル (John Keill＝オクスフォード大学・天文学教授) の著書の蘭訳版『真実の宇宙と真実の天文学への手引き』(Inleiding tot de waare Natuur en Sterre Kunde) も輸入されていて，志筑忠雄の『暦象新書』において，地動説やニュートンの物理学説を紹介している．

高野長英の翻訳で有名になった『三兵タクチーキ』は，近代戦における歩兵・騎兵・砲兵の運用について説いた兵学書であるが，ドイツ軍人ディッケル(Decker)の著書であって，天保15年(1844)，第十二代将軍徳川家慶と老中水野忠邦の発注にもとづいて，スタト・ティール号により到着した．長英は，脱獄・逃亡中に長崎でこれを手に入れ，潜伏中に翻訳したといわれる (現在静岡の葵文庫に架蔵されている)．原書名は，Taktiek der drie wapens ; infanterie, kavalrie en artillerie in den nieuwere kriegsvoeringである．おそらく，長崎の通詞を通じて入手したものであろう．幕府は，スタト・ティール号により発注文を多数入手しているが，そのほとんどは兵法・砲術・築城などに関する書籍である (詳細は山脇悌二郎『長崎のオランダ商館』中公新書，170ページ以降に詳しい)．

⑥図書以外の医（理）学機器・薬品

医療機器として多いのは顕微鏡 (microscopium) であって，初輸入品は延享4

年(1747)に2台入着し，1台は九代将軍家重の注文品，他の1台は長崎奉行田付又四郎の注文品である。8年後の宝暦4年(1754)にも2台が到来したが，いずれも将軍家重の発注品と記載されているから，幕医または実力大名の藩医の研究用であろう。顕微鏡の輸入はその後も引き続いて行なわれた模様である。原産国はオランダおよびイギリス製が主であった。しかし，18世紀後半(1781)には，鏡筒が紙地に漆黒塗りの木製顕微鏡が国産化されている。19世紀に入ると，オランダ製顕微鏡を真似て，鏡筒以外のべっ甲製の国産顕微鏡が現われている。その頃には，すでにイギリスではプリズム使用の双眼顕微鏡が開発されていた。

ついでながら，医用ではないが天文・暦学用具として，天球儀，運天儀，四分儀，天体望遠鏡なども，承応元年(1652)以降たびたび輸入されていた。杉田玄白の『蘭学事始』にある「ドンクルカームル暗室写真鏡」とは，夜間でも解像力のある眼鏡（doncker camer glass）のことで，レンズの明度が高い眼鏡のことであろう。通常の「虫めがね」よりは程度が高いものであろう。1844年には水野忠邦も入手している。因みに，「虫眼鏡」は，当初「虱のめがね」といわれた。オランダ船の船員が体についた虱をとるのに使っていたためだという。玄白は望遠鏡を「千里鏡」とよんでいる（杉田玄白『和蘭医事問答』）。

⑦薬木・医薬品類の輸入

蘭医学を基礎に治療するためには，それに付随する医学品類の輸入は当然必要となってくる。医学品としては薬用油（oilteijit）と膏薬（enrplatre, unguentum）が延享年間（1744～47）に輸入が増えてきた。水銀剤（第一水銀と硫黄・薬用硝石を調合した軟膏）や，テリカ（theriac＝70種ほどの薬物粉末を蜂蜜で煉り固めたものという。蝮の毒消し用），サルサパリル根（radix salsaparill＝性病薬；煎じ薬で南米原産），セメンシナ（semencinae；菊科のヨモギ属の植物の頭花・種子を原料としてオランダで製薬したもの。小児の虫下しの特効薬），ヒオスシアム（extract hijoscijamus；眼病用の瞳孔散大薬）などが輸入されている。

杉田玄白の『和蘭医事問答』には，一名「頭棒糖」という「甘草膏」が「痰切り」剤として用いられていた記録があるから，これらは製剤した形で輸入されていた。すなわち，

「全体『スートホウト』(zoethout) は甘草の事，其煎蒸(せんじょう)して膏になしたるものを『ドロップスートホート』(drop-zoethout) と申(もうし)候」

とあるから，今日の「セキ止めドロップ」の「はしり」である．

当然，古くから到来していた朝鮮人参などと同様，薬木・薬草の類も輸入している．たとえば，丁子(ちょうじ)，肉豆蔻(にくずく)，肉桂(にっけい)，黄檀，阿仙薬，没薬(もつやく)，藤黄(とうおう)，竜脳，盧薈(ろかい)，ビリリなどのほか，阿片（初見は1749）やジキタリス葉（digitalis bladen；強心薬を抽出）など，発汗，緩下剤調合用の原料などが積荷目録に示されている．

⑧その他の外来医学書・理学書など

これまでに掲げたものは，主としてオランダ東インド会社が輸入して，送り状に記載があるものであるが，当時のわが国の翻訳書や医学著書から拾ってみると，前記以外の到来書が判るので，代表的なものを列記してみよう（順は不同）．

・フーフェランドの『内科書』の蘭訳本．これは緒方洪庵が訳出して『扶民経験遺訓』(30巻）として刊行した．

・ホルテル（ブールハーフェ）の『内科書』は宇田川玄随訳で『内科撰要』『重補西説内科撰要』がある．

・スウィーテンの著書の宇田川玄眞訳には『軍中備用法』がある．

・スウィーテンの著書の箕作阮甫訳には『スウィーテン・発班熱』がある．

・ヘイステルの著書には，大槻玄沢訳の『瘍医新書』『増訳八刺精要』，大槻盤里訳『要術知新』『外科收功繃帯図式』がある．

・ヨアン・ブラエウの地球図を解説したものに，野呂元丈・青木昆陽の『地球古図』がある．

・フェスリング（Johan Vesling）の蘭語本を底本として書かれたとみられるのが，山脇東洋の『蔵志』であるという．

・ライデン大学『ライデン薬局方』を訳出した宇田川榕庵の『ライデン薬局方』，『オランダ薬物学』がある．

・リンネ（Carl von Linné）の植物分類法を訳して，宇田川榕庵は『植学啓原』を著(あら)わした．

・ヘンリーの『Elements of Experimental Chemistry』の蘭訳本を邦訳して，宇田川榕庵は『舎密開宗』を著わした。

・オランダ（輸入地図）を複図して和訳を付したもので，司馬江漢の『和蘭瀕海図』『和蘭通舶』『銅板世界地図』などがある。

・ウィレム・ホフマン（Willem Hoffman）の蘭訳本『外科解剖入門書』（原典はアンブロアズ・パレ〔Ambroise Paré〕著）を，大通詞楢林鎮山が『外科宗伝』二巻として著した。

次に，杉田玄白が目にしたという輸入の外国書名を挙げてみる。

杉田玄白が『和蘭医事問答』のなかで，建部清庵に答えた「鶴斎杉田先生答書」には，

「（前略）右の諸士著候類，是迄見当り候書数十部」として「内景説候書」を挙げ，

「（前略）右出類，医家に与り候書計も夥敷座唐候．悉外題記不申候．是又御望に候者，追而書付入御覧可申候」

と「治療書」を付け加えている。それらを列挙すると次のとおりである。

◉内景の書（注；解剖書のこと）の著者名

(i)コルムス（注；Johan Adam Kulmus，1689～1754．ドイツ・ダンチヒの解剖学教授であって，『ターヘル・アナトミア＝Tabulae anatomicae』の原著者という）

(ii)ブランカールツ（注；Steven Blaukaart，1650～1700．オランダの医学者である）

(iii)カスパリュス（注；Casper Bartholin Sr.，1585～1629．デンマークの医学者で，一般に「カスパリュスの解剖書」として大いに珍重されたが，この書を実際に作り上げたのは，その子のThomas Bartholin，1616～1680であったという）

(iv)コイテル（注；Volcher Coiter，1535～1600．オランダ人であるがドイツの医学界で活躍した人である）

(v)パルヘキン（注；Jean Palhyn，1650～1730．ベルギーの医学者であり，外科用人体解剖学などの著書があり，産科鉗子を創めたことで有名である）

(vi)ハルヘイン（注；Philippe Verheyen，1648～1710．ドイツの医学者である）

◉治療の書の著者

(i)マタローストロースト（注；玄白自身が〔内外医書〕と注書している．J. Kouwenburg の著書 Zeechirurgie, of Matroozen Troost で，1721年に刊行されたものであり，著者名ではない．その1760年版を桂川甫周が抄訳して，『海上備要方』と題し，文化12年(1815)に刊行している．初刊に遅れること96年，１世紀弱である）

(ii)ボヰセン（注；玄白自身が〔内科の書〕と注書している．Henricus Buyzenのことで，著書名は『Practyk der medicine』1712年刊の書籍である）

(iii)ブカン（注；玄白自身の注書は〔上ニ同〕とあるから〔内科の書〕ということ．William Buchan，1729～1805．著書名は『Huislyke Geneeskunde』1772年刊行のものである）

(iv)アンブルシスパーレ（注；玄白自身の注では〔医家に係り候事集成の書なり〕とある．Ambroise Paré，1510～1590．フランスの外科医として，外科の近代化を手がけた人という．著書名は『De chirurgie, ende alle de opera』1592年刊である）

(v)アポテーキ（注；玄白自身の注書では〔内外方彙之書〕とあり，内服薬，外用薬の処方集ということである．原書名は『d' Amsterdammer apotheck』であるから，『アムステルダム薬局方』となる．1736年刊行のもの）

(vi)ウヲヰトシカットカームル（注；玄白自身の注書では〔内外医方法集成の書〕とある．J. J. Wayt—1671～1709のGazophylacium medico-plysicium oder Schatzkammer〔『医事集成宝函』〕の蘭訳本であって，1761年刊行のもの）

(vii)ショメールホイスホウデレーキ（注；玄白自身の注書で〔右ニ同〕とあるから，〔内外医方法集成の書〕ということになる．Noel Chomel，1632～1712の『Huyshoudelyk Woordenboek』〔日常家庭用百科辞典〕であって，1743年に刊行された．宇田川榕斎が幕命をうけ，坪井信道も助力したとみられる邦訳本『厚生新編』の底本であり，辞典類の項で説明したもの）

(viii)ヘーストル（注；玄白自身の注書は〔内外医書〕である．Lorenz Heister，1683～1758．ドイツの医学者であって，著書名は『Heelkundige Onder wyzingen』であって，1755年刊本である）

(ix)ホウチュルン（注；玄白自身の注書は〔外科書〕とある．M. Hauttuyn が G. J.

De Verney の著書『Geneesen heelkundige verhandeling』〔内科外科書〕を蘭訳した書籍とみられる）

(x)ワアペンホイス（注；玄白自身の注書は〔右ニ同〕とあるから，〔外科書〕となる。J. Scultetusの書『Het vermeerderde wapenhuis der heelmeesters』〔増補外科武器庫〕の1748年刊とみられる）

・これらのほか，明治になって来日したドイツ人リッター（Hermann Ritter）が大坂理学校で講義をした講義録の邦訳『理化日記』（平岡盛三郎訳）などを含めれば，ここに掲げなかった蘭学書やドイツ，フランスの医学書は多数あると思われる（前記がすべてではない）。

以上は，まことに大雑把（おおざっぱ）に取り上げた概要で，蘭書輸入の一部を紹介しているに過ぎない。概して輸入蘭書の流れをみると，初期には幕府の規制から，幕府みずからが発注して取り寄せたり，各藩が幕府の許可を得て注文・輸入を行なっていた。また，書価も比較的に高いため，藩や幕府の費用で購入依頼をする藩医たちも多かったとみられる。

一つの特徴は，オランダ商館駐在医が，商館員や船員治療・診療上必要な医学知識を高めるため，および，通詞たちに医学講義を行なうため，テキストとして医学書や辞書が輸入されていて，これらが写本されたり，使用上古くなったものが市中に流出したりしたものが多かったとみられる。

大槻玄沢の『蘭学階梯』は，次のように述べている。

「往々，舶来ノ群籍，諸家秘蔵スル所ニシテ，余等，既ニ目撃スルモノ数十部ニ及ブ。近来，吾ガ輩ノ飜訳ノ業ヲ起スノ際，訳家ヨリ請ヒ受テ各々家蔵スルモノ，亦少カラズ」と。

すなわち，訳家とは通詞であって，通詞と接触をもつことによって，書籍の入手が可能であったことを裏書きしている。また，オランダ船積荷のなかにも，その送り状に「通詞に贈るため（om tot geschenk te emploijeeren）」とか，「通詞団へ（voor't collegie der tolken）」とかの記載があるものが多くみられるが（山脇氏前掲書），これは前記のことを裏付けている。

さらに，オランダ東インド会社解散後は，バタフィアのオランダ市民の私的貿易組合が，脇荷として持ち込んできたものが増加したが，これは当時の日本側需要の高まりから，かなり高利潤を得られる商品となっていたことによる．蘭書類の輸入量は，2世紀半の間を通じて幕府の政策に大きく左右された．取り締りが厳しくなれば，何年にもわたって蘭書の輸入が行なわれない期間もあったのである．

石黒忠悳は，次のような懐旧談を語っている[18]．

「……長崎屋というのは，幕府が長崎で貿易した品を払下げる店であり，天竺屋は横浜の外商と取引していました．長崎屋へ荷物が着くのは毎年二度ぐらいで，それは，蘭船が積んで来る新品を取次ぎ，そのなかに書物もあるのですが，そのうちの良いものは大部分蕃所調所や医学所や天文台で引抜き，その残りを長崎屋が払下げるのでした．それで医書でもあまり必要ない大冊ものが来るかと思うと，必要の書物で小巻（しようかん）の容積をとらぬものでも来ないというような，真（まこと）に雑然たるものであったから，良い本を早く見付けて自分の手に入れたいところから，長崎に荷が着いたと聞くと先を争って購読するのでした．

こういう書物に不便の時代でしたから，必要の書物で部数の少いものは，写し取って読むのですが，蘭文を写すにしても紙もペンもインキもない．（中略）これを皆自分の手で造り上げたものです．（中略）ペンは下谷広徳（こうとく）寺前の羽根問屋から太い鳥の羽根を買って来て剃刀（かみそり）でそいで鵝（が）ペンを作るのですが，尖端を割るのがすこぶるむずかしい．」

この記述からみても，当時の蘭学を学ぶ人びとがいかに苦労したかが理解できよう．

〔注〕

(1)　広瀬豊『吉田松陰の研究』東京武蔵野書房，昭和18.10.25，pp.616～619.

(2)　赤木昭夫『蘭学の時代』〔中公新書〕中央公論社，昭和55.12.10，pp.6～7.

(3)　青木一郎『坪井信道詩文及書翰集』岐阜県医師会，昭和50.4月，pp.255～256.

(4)　注(2)と同じ．ただしpp.35～36.

(5) 富士川游著・小川鼎三校注『日本医学史綱要２』平凡社，1974.11.11，p.103.
(6) 島津家文書目録(五)第五括〔東京大学維新史料編纂事務局蔵〕.
(7) 同前．未刊行本で，自署がある．
(8) 伴忠康『適塾をめぐる人々』創元社，1978．2 .20，p．3．
(9) 同前．ただしp.32.
(10) 元大野藩校であった大野洋学館で使用されたものが，現在ほとんど福井県の大野高等学校に保存されているとのことである．
(11) 長与専斎『松香私志』〔小川鼎三・酒井シヅ校注「松本順自伝・長与専斎自伝」〕平凡社，1980．9 .20，p.109.
(12) 石黒忠悳『懐旧九十年』岩波文庫．
(13) 拙稿「徳川鎖国期（幕末）の技術導入」中央学院大学比較文化研究所紀要第４号，1990．3月，pp.50～51.
(14) 前掲注(2)と同じ．
(15) 同前．ただしpp.111～118.
(16) 山脇悌二郎『長崎のオランダ商館』〔中公新書〕中央公論社，昭和55．6 .15，p.91.
(17) 注(8)と同じ．
(18) 注(12)と同じ．